慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	黄河のイメージ : 王之渙「登鸛鵲楼」と「涼州詞」をめぐって
Sub Title	An image of Huanghe : Wang Zhihuan "Deng Guanquelou" and "Liangzhouci"
Author	今原, 和正(Imahara, Kazumasa)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.24- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岡晴夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

黄河のイメージ

——王之渙「登鸛鵲楼」と「涼州詞」をめぐって——

今原　和正

一

登鸛鵲楼

白日依山尽　黄河入海流
欲窮千里目　更上一層楼

鸛鵲楼に登る

白日　山に依って尽き　黄河　海に入りて流る
千里の目を窮めんと欲し　更に上る　一層の楼

山西省永済県から西南へ約十三キロ行ったところに、蒲州鎮という町がある。唐代の蒲州（河中府）。その古名を留めるこの町の西を、広い川幅の黄河が北から南へと流れてゆく。今でもこのあたりにはいくつもの中州が点在するが、西魏（五三五～五五六）の時代、そうした広大な中州のひとつに、中潭城という城郭が築かれた。鸛鵲楼とはその中潭城の城壁の西南の隅に造られた三層の城楼で、北周（五六〇～五八一）の宇文護が建てたものといわれている。(一)

その鸛鵲楼は北宋の時代におきた黄河の大氾濫や元初の戦火のために消失し、その後、鸛鵲楼の扁額をかかげて失われた旧楼の代わりに人々に親しまれた蒲州城の城楼も、これまた消失してしまった。近年、観光名所として、唐代の建築様式を模した新たな楼が建設されているという。[二] このあたりから南へ二五キロほど下ったところで、黄河はほぼ直角に東に折れ、東流する黄河の北岸に沿って、中条山の山なみがつらなっている。北から流れ来る黄河の流れとその西側に広がる渭河平原、そして南につらなる中条山の山なみ。これが鸛鵲楼から眺められる風景の骨格をなしていることは、今も昔も変わりはない。

この楼に登って詩を賦した詩人として、王之渙、暢当、李益らの名が伝わるが、[三] そのなかでも王之渙の作とされるこの詩は、その後さまざまな選集に採録され、清代の記録[四]では「市井の児童も皆知りて之を誦す」というほどに知れわたり、またわが国においても、『唐詩選』に採られているためか、この詩を知る人は多い。前半二句の雄大な光景、後半二句の気の利いた表現。それが人々に愛唱され続けてきた理由であろう。が、吉川幸次郎氏は『続人間詩話』（岩波新書　一九六一年）の「その五十一　王之渙」の冒頭で、次のように述べている。

有名な詩というものは、誰にでも感動を与えるから、有名な詩なのである。誰にでも感動を与えるというのは、非凡な発想と、非凡な表現とが、その詩にあるからであり、しかもその非凡さが、誰にでもすぐぱっとうけとめられる形に、しくまれているからである。しかしそれだけに、その非凡さを感ずることは容易でも、一つ一つの字句を解釈しようとすると、非凡なだけに困難を感ずる場合が、少なくない。

八世紀の詩人である王之渙の、有名な五言絶句も、それに属するかと思われる。

市井の児童がそらんじているような詩。その平易さのうちにひそむ非凡さを説き明かそうとする吉川氏の試みは、四十年以上もたった今でもなお、解決されねばならない問題を含んでいると思う。そこで、本論では、吉川氏の説を紹介しながら、この詩に対する私の解釈を示すことにする。

最初に、一句目の「白日」について、吉川氏は、

> まっしろにぎらぎらとかがやく、まひるの太陽というのが、普通の語義である。注釈書のあるものが誤るように、落日の意味ではない。

と述べている。例えば明の唐汝詢が「日没河流之景」（『唐詩解』）というように、この句を、夕日が山に沈む光景、と解釈することには、吉川氏は賛意を示さない。これに対して清水茂氏は、「ぎらぎらとかがやく、まひるの太陽」というのは必ずしも普通の語義ではないということ、また「白日」の「白」は「意味」をほとんど持たない余分な（redundant）ことばであるということ、を論証するとともに、一句目については次のような見解を述べる。(五)

> この詩において、「白日」が「夕方の太陽」であり得るのは、「依山尽」を、「西の山にもたれるように、沈みゆく」と解するからであって、もし夕方を示すことばがなければ、だれも「白日」を「夕日」だとはしないであろう。……この王之渙の詩について、「白日」は、夕方の太陽であるといってもよいが、辞典が「白日」そのものに、「夕

日」という解を与えるのは、まちがいとせねばならない。（傍点清水氏）　……

「白日」は「日」というのにほぼひとしく、それ自体は「まひるの太陽」とも「夕方の太陽」とも規定していない。まひるの光景の中に使われれば、それは「まひるの太陽」であり、夕方の光景の中に使われれば、それは「夕方の太陽」なのである。だから、「白日」を「夕方の太陽」と解するかぎり、この句そのものには何の問題も生じない。「夕日が山にもたれるようにして沈んでゆく」という光景を思い浮かべればよいからだ。だが、「白日」を「ぎらぎらとかがやく、まひるの太陽」と解釈すると、今度は「依山尽」の解釈を変えなければならない。昼間から日が沈むことはないからだ。

そこで吉川氏は、この句を次のように説明する。

ここの「白日」の二字は、太陽そのものよりも、ぎらぎらと光る太陽を中心として、その射出する光の矢に充満した天空をいうと思われる。それは大きく平野の上にかぶさり、たれさがり、地平と接するが、地平のふちどりとしてあるのは山なみである。その山なみにもたれかかるようにして、白日の支配する領域は、尽ききわまっているというのが、「白日依山尽」という五字によって、詩人の意味せんとするものであったと、私は考える。

この解釈は、私には、やはりいささか無理があるように思える。「白日」はあくまで太陽そのものでなければならないだろう。このような解釈をしてまで、何故、吉川氏は「白日」＝「まひるの太陽」にこだわるのだろうか。吉川氏はその理由を明らかにはしていない。ややもすれば曲解とも受け取られかねないこの解釈を、私はとても興味深く思う。

すぐれた直感と想像力が考証の壁を越えてしまったのではないか、と思われるからだ。が、それは必ずしも、吉川氏の学者としての資質と業績を否定するものではない。そして、私も、ここでの「白日」は「まっしろにぎらぎらとかがやく、まひるの太陽」でなければならないと考えるのだが、その根拠として、次の記載を引こう。

史記曰、禹本紀言、河出崑崙。崑崙甚高三千五百余里、日月所相避隠為光明也。

（唐・欧陽詢『芸文類聚』巻七　山部下　崑崙山）

史記に曰わく、禹本紀に言う、河は崑崙に出ず。崑崙は甚だ高く三千五百余里、日月の相い避隠して光明を為す所なり、と。

一里を五百六十メートルとすれば、三千五百里は、およそ一百九十六万メートル。約二百万メートルの高さというのは、むろん現実的な数値ではないが、この高さなら「ぎらぎらとかがやく、まひるの太陽」が隠れてしまうのに十分であろう。「白日」が「山に依って尽きる」のは、山が高いからだ、という指摘はすでにあるが、[六] その山が崑崙山だとする指摘は寡聞にして知らない。注釈家の多くはこの山を中条山としているが、中条山脈の最高峰は雪花山で、海抜は一九九三メートル。昼間から太陽が隠れるほどの高さではない。それになにより、方角的におかしい。「白日」＝「まひるの太陽」が「依って尽きる」＝「もたれるように沈んでいく」ことのできる「山」は、伝説上の崑崙山しかないのである。つまり、この句は、中条山に太陽が隠れてくゆくさまを鸛鵲楼から描いた実景、ではなくて、はるか西のかな

た、黄河の源の光景を想像したもの、と理解すべきものなのである。この詩が作られてからさほど時を経ていない時期にも、どうやらそうした解釈をしていた人々がいたようである。建中元年[七]（七八〇）に書かれたと思われる李翰の「河中府鸛鵲楼集序」のなかに次のような記載がある。

概四方雋秀有登者、悠然遠心、如思龍門、若望崑崙。

概ね四方の雋秀の登ること有る者、悠然として心を遠くし、龍門を思うが如く、崑崙を望むが若し。

鸛鵲楼に登った李翰たちは、そこにすでに書き付けられた詩を目にしたわけだが、「若望崑崙」という表現が王之渙の作とされるこの句を指すことは間違いなかろう。「如思龍門」については、はっきりしたことはわからない。鸛鵲楼があったあたりから北へ九十キロほど黄河をさかのぼったところで、汾河が黄河に合流する。龍門とはこのあたりの地名である。李益の「同崔邠登鸛鵲楼」の三句目の「漢家簫鼓空流水」という表現は、漢の武帝が汾陰で后土を祠ったときの「秋風辞」をふまえるもので、あるいは「如思龍門」とは、李益のこの句を指すかと思われるが、制作年代の問題もあって、何とも言えない[八]。ただ、その文脈からすれば、王之渙の作とされるこの詩以外に、北の方角を望んでうたった詩があったことは確かである。

さて、一句目が黄河の西の果てを想像して描いたものなら、二句目も黄河の東の果てをこれまた想像して描いたものであろう。黄河の源とは異なり、黄河の河口は人々が実際に目にすることができるが、文献としてはつぎのような記載

がある。

淮南子、又曰、河水九折注海而流不絶者、有崑崙之輸也。

（唐・欧陽詢『芸文類聚』巻八　水部上　河水）

淮南子、又た曰う、河水は九折して海に注いで而も流れの絶えざるは、崑崙の輸る有ればなり、と。

鸛鵲楼からは、当然、黄河が海に注ぐ光景を目にすることはできない。それゆえ、人は皆この句を眼前の実景と関係づけて解してきた。例えば吉川氏も、「やがては東海にそそぎ込むべき大地の大動脈として、すさまじいエネルギーをたたえたぎらせつつ、黄河はここを流れている、ということでなければならない。」と述べている。一句目を実景ととらえると、二句目が想像であるとの発想はなかなか生まれてこない。一句目が想像であることに気がつけば、二句目も想像だと考えるのが自然である。

つぎに、三句目の「千里」についてだが、吉川氏は次のような注目すべき指摘をしている。

黄河の河道は、発源以来、海にはいるまでに、九度屈折し、屈折して方向をかえるごとに千里を流れる、といういいつたえが、『山海経』、『水経注』などに見える。鸛鵲楼のある河中府は、その最後のまがり角であって、ここ

までの千里を、南に流れてきた黄河は、ここのやや南のところで、直角に東に折れ、最後の千里を東へと流れ、やがて海にはいる。すると、「千里の目を窮める」ということは、千里先の黄河の河口、それはもとより現実には見えるべくもないが、そこまでも見はるかすべく、さらに一層の楼を上る、もう一つ上の階へのぼる、ということになる。

私も、ここでの「千里」とは、ただ単に距離の遠いことをいう語ではなくて、黄河が大きく曲がる地点を指す語だと考える。『山海経』『水経注』のほかにも、次のような記載がある。

物理論曰、河色黄赤、衆川之流、蓋濁之也。百里一小曲、千里一大曲一直。

（唐・欧陽詢『芸文類聚』　巻八　水部上　河水）

物理論に曰わく、河色の黄赤なるは、衆川の流れ、蓋し之を濁せるなり。百里に一小曲、千里に一大曲して一直す。

実際、地図を見ると、鸛鵲楼のある位置から北へ六百キロほどのところで黄河は大きく曲がっている。しかしながら、吉川氏の「鸛鵲楼のある河中府は、その最後のまがり角であって」という指摘はいささか修正しなければならないかもしれない。唐代、黄河は河中府から東へおよそ一千二百里ほど離れた河北道魏州（澶州）臨黄のあたりでほぼ直角に北に向きを変え、さらに千里ほど流れて渤海に注いでいた。[九] こうしたこともあってか、吉川氏のこの説は今日ではほとん

ど顧みられていないが、一句目と二句目が想像上の光景だとすると、千里一大曲の説がにわかに生きてくるのである。つまり、黄河が北から流れてきて大きく東へと流れを変えるあたりで、作者は黄河の西の果てと東の果ての光景を頭に思い描いた。だが、黄河の全体を一目で見ることは、むろんできることではない。せめて、北と東（実際は北だけだろうが）、黄河が大きく曲がるあたりを見ることはできないか、そう思ってさらに一階上へのぼった、ということではなかろうか。

私がここで引用した記載は、いずれも『芸文類聚』に見られるものであるが、『芸文類聚』は初唐に成立した類書で、当時の知識人の常識をある程度反映するものと理解してよいであろう。西の果て、天に届かんばかりの崑崙山に源を発する黄河は、坂を下るようにして流れ、千里流れるごとに大きく折れ曲がり、そして東の海に注ぐ。これが当時の人々の思い描いていた黄河のイメージであろう。そして、このイメージをふまえて、現実の光景を一つも描くことなく、五言四句という最小詩形に、可能な限りの大きな光景を描くことに成功したのが、この詩なのである。さらにいうなら、この詩は二聯とも対句で構成され、特に後半の二句は流水対という高度な技法を用いているのだが、そんなことをまったく感じさせないほどに自然な詩であり、作者の技量のほどをうかがわせるものである。当然、人々の興味は、このようなすぐれた詩を作った詩人に向けられるであろう。

この詩の作者について、清水茂氏は次のように述べている。(十)

この詩を収めるいちばん早い總集は、唐の芮挺章の『國秀集』巻下であるが、処士朱斌の作とされる。

この總集には、別に王之渙の作として、巻下に三首収められているので、『國秀集』の編者は王之渙の作品ではないとしていたことになる。これを王之渙の作としたのは、いつごろにはじまるかあきらかではないが、宋初の太宗皇帝の勅命によって李昉らが編集した『文苑英華』巻三一二には、もう王之渙作として収められており、計有功の『唐詩紀事』巻二六、洪邁の『唐人万首絶句』五言、巻一五（嘉靖刊本の巻次による、下も同じ）にも、王之渙の作として収める。宋代以後は、王之渙の作とされるのがふつうのようであるが、同時代人と思われる芮挺章が、王之渙の作とせず、朱斌の作としているのは、無視できないであろう。やや後輩の李翰（貞元十八年（八〇三）以後没）（「河中鸛鵲楼集序」『文苑英華』巻七一〇）に、鸛鵲楼に関する詩について、王之渙と李翰のあいだの詩人と思われる暢諸（兄、暢当は、大歴七年（七七二）の進士、鸛鵲楼の詩は『全唐詩』では、暢当の作とする）の名をあげて、王之渙の名をあげないのは、消極的に、この詩が、当時、王之渙「鸛鵲楼に登る」詩でなかったことを傍証すると思われる。おそらく、朱斌にこの詩の著作権を帰するのが妥当であろうが、作者の問題は、この論文の主題でないので、断定は避け、しばらく俗にしたがって、この詩を王之渙の作品としておく。

中国でも、一九八〇年代以降、作者王之渙説を疑う論文が何篇か発表されている。[十二] たしかに作者王之渙説には確たる根拠はない。では、作者朱斌説の根拠は確実なものであろうか。清水氏は控えめながらも、李翰の「河中鸛鵲楼集序」に王之渙の名をあげていないことを、作者王之渙説を否定する傍証としているが、すでに見たとおり、名をあげられなかったのは王之渙だけではなく、「如思龍門」の詩の作者の名もあげられていない。いずれも「四方雋秀有登者」とひ

とくくりにされており、これらの作者の名をあげなかったのは、あるいは文章のレトリックの問題なのかもしれないが、私はむしろ、李翰がなぜ暢諸の名をあげたかということを問題とすべきだと思う。李翰はここで暢諸のことを「前輩」と言い、「暢生」と言っている。[十二] いずれも親しみの中にも敬意を込めた表現であり、李翰及びその場に居合わせた人々と暢諸の関係の浅からぬ事を暗示しているように思える。あるいは何らかの意図があって暢諸を顕彰しようとしたのかも知れないが、いずれにせよ、王之渙の名があげられていないことはそれほど重要なことではなく、したがって、作者王之渙説を否定する傍証にもなりにくいのではないかと考える。作者朱斌説の根拠となるものは、やはり芮挺章の『國秀集』の記載だけなのである。『国秀集』は確かに同時代の詩人の作品を収録しており、その意味では資料的な価値もあるのだが、それは必ずしも資料として全面的に信頼を寄せてよいということにはならない。同時代ゆえの流動的な部分をもその中に含むからである。『国秀集』のこの記載は、作者朱斌説が当時行われていた、ということをしめすものであって、それはあるいは誤りであったのかも知れないのである。『国秀集』には作者の誤収があることなども考えあわせると、ほかに有力な証拠がないかぎり、作者朱斌説もにわかに受け入れがたいものがあるのである。[十三] したがって、現時点では、この詩の作者は未詳ということになるのだろうが、それもなにやら居心地が悪い。そもそも、ほかに一篇の作品も伝わらず、詩人としての逸話も残さず、実際に存在していたかどうかもわからない人物を、このすぐれた詩の作者とすること自体が、きわめて居心地が悪いのである。作者朱佐日説[十四]や作者朱佐時説[十五]が生まれたのも、すでに作者朱斌説が行われていたことをしめすと同時に、その説に人々がとまどっていたことを物語っていると思う。山西省の出身で、別集は残さないが、すぐれた詩をいくつか伝え、高名な詩人とも交際があり、みずからも詩人としての逸話も残す、そんな王之渙がひとたび作者に擬せられるや、人々は皆一様に居心地がよくなったのであろう。たしかに近年、作者朱

斌説が有力になってきているが、現時点では、この詩の作者は、私も、俗にしたがって王之渙としておきたい。

その王之渙の作として名高いのが「涼州詞」である。

涼州詞其一

黄河遠上白雲間　一片孤城万仞山
羌笛何須怨楊柳　春光不度玉門関

黄河　遠く上る　白雲の間　一片の孤城　万仞の山
羌笛　何ぞ須いん　楊柳を怨むを　春光　度らず　玉門関

唐の絶句の「圧巻」の一つにあげられる有名な詩である。そしてこの詩もやはり、平易さのうちに非凡さを秘めたものである。一読すると、この詩は出征兵士の嘆きをうたったもののように思える。だとすると、この兵士はどこにいるのだろうか。詩から読みとれるのは、玉門関または玉門関より西の、黄河上流の万仞の山に築かれた孤城、ということになる。しかしながら、玉門関は長安から北西へ三千七百里あまり、今の甘粛省敦煌市にあり、[十六]黄河はそこから東南に戻ること二千三百里あまり、蘭州のあたりを北へ流れている。つまり、玉門関と黄河は地理的に離れており、一つの場面に描くことは不自然なのである。この地理的矛盾をどう解釈するか、そこにこの詩の非凡さを説くカギがひそんでいるように思う。この詩が作者の実体験にもとづくものとすれば、こうした矛盾はあり得ない。同じことは出征兵士の立場で書かれたする解釈にも言えるのではないか。この詩の同時代の読者のなかには、実際に玉門関から戻ってきた人も少なからずいたはずで、彼らからすれば、このような「誤り」は大いに興をそぐものであったろう。こうした地理的矛盾があっても許されるのは、出征した夫や恋人を思う女性の立場で書かれたとする解釈だけだろう。夫や恋人のいる辺

塞の地について、彼女は漠然とした知識しか持っていない。そのことがまた哀れを誘うのである。当時、長安や洛陽でも羌笛の音を聞くことができた。その悲しげな音色が、別れのつらさをうたった「折楊柳」の曲をかなでている。あの人のいる玉門関は春も来ないという。あの人のいる玉門関、それはどんなところなのだろう。そんなとき、彼女の脳裏に描かれたのが、先に述べた黄河のイメージなのである。つまり、ここでの地理的矛盾は、黄河のイメージを用いての確信犯的ものなのだと、私は思うのである。ひとひねりもふたひねりもしたこの詩の作者、王之渙。黄河のイメージという細い糸でも、「登鸛鵲楼」の詩とつながっているような気がする。

付記　唐の薛用弱の『集異記』に記された「旗亭画壁」のエピソード[十七]は、最初の妓女がうたった王昌齢の「芙蓉楼にて辛漸を送る」の制作年代が王之渙の没年よりも後であるということで、作り話ということになっている。それに対して、譚優学氏は『唐詩人行年考』（四川人民出版社　一九八一年）の「王昌齢考」のなかで、この話は極めてあり得ることとして、その年を開元二十四年と推定し、かつ、王昌齢の「芙蓉楼にて辛漸を送る」については、それは誤記ではないかとしている。譚氏のこの説も、吉川氏同様、考証の限界を超えているかのようで、はなはだ興味深い。二番目の妓女のうたった詩は、その部分だけ見れば、女性の思いをうたったものと理解できる。三番目の妓女のうたった詩は、いうまでもなく、女性の悲哀をうたったものである。そして私の解釈が正しければ、最後の妓女がうたった詩も、女性の思いをうたった詩である。とすると、最初の妓女がうたった王昌齢の「芙蓉楼にて辛漸を送る」は、いかにも場違いという気がしてきて、譚氏の説を支持したくなる。

注

（一）鸛鵲楼の所在地については松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店　一九九九年）に詳しい。
（二）張忠綱・董利偉『江山勝迹待登臨』（河北人民出版社　二〇〇二年）。
（三）宋・李頎『古今詩話』　なお、宋・沈括『夢渓筆談』には暢当の代わりに暢諸の名をあげる。
（四）清・潘徳輿『養一斎詩話』。
（五）清水茂「白日の解釈」（『吉川幸次郎退休記念論文集』筑摩書房　一九六八年）。なお、この詩の解釈については松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』に詳しい。
（六）竺顕常『唐詩解頤』など。
（七）趙公すなわち趙恵伯は、『旧唐書』「代宗紀」「徳宗紀」によれば、大歴十四年三月に河南尹となり、建中二年正月に河中尹となっている。李翰の「河中府鸛鵲楼集序」の「河南尹趙公、受帝新命、宣風三晋」の語から、この序文は趙恵伯が河中尹となった建中二年のこととする説がおこなわれているが、「八月天高、獲登茲楼」の語から明らかなように、この序文は八月に書かれたものである。建中二年の七月には、関播に替わって李承が河中尹となったという記事が見え、したがってこの序文が書かれたのは建中二年ではないことになる。「受帝新命、宣風三晋」の語は、おそらくは、建中元年八月、杜亜が河中尹から睦州刺史に転出した後、翌年正月に正式に河中尹に任命されるまでの間、趙恵伯がこの地域の政治を任されていたことをいうのであろう。もし建中二年のこととすれば、正式に河中尹となったあとのことであり、序文に河南尹と言い、河中尹と言わないのは不自然である。
（八）譚優学氏はこの詩の制作年代を貞元十三年（七九七年）のこととする。この年李益は幽州の劉済の幕に赴いており、鸛鵲楼にはその途中立ち寄ったと考えてのことである。しかし、李益はそれ以前の大暦四年から十三年頃まで、しばしの北征の時期をはさんで、河中府からそう遠くない華州鄭県に居を構えていたのである。この詩がこの時期のものと考えることも十分に可能である。なお、詩題に見える崔邠は、李翰の「河中府鸛鵲楼集序」に見える崔邠と同一人物であろう。
（九）『中国歴史地図集』隋・唐・五代十国期（中国地図出版社　一九九六年）および『旧唐書』地理志二。
（十）清水茂氏。前掲論文。

（十一）林貞愛「登鸛鵲楼非王之渙詩」（社会科学戦線　一九八二年四期）　史佳「登鸛鵲楼作者質疑」（学術月刊一九八七年二期）など。

（十二）前輩暢諸、題詩上層、名播前後、山川景象、備於一言。上客有前美原尉宇文邈、前櫟陽郡鄭鯤、文行光達、名重当時。呉興姚係、長櫟馮曾、清河崔邠、鴻筆佳什、声聞遠方、将刷羽青天、追飛太清、相与言詩、以継暢生之作。

（十三）傅璇琮『唐人選唐詩新編』（陝西人民教育出版社　一九九六年）。

（十四）宋・范成大『呉郡志』所引唐張著『翰林盛事』。佟培基『全唐詩重出誤収考』による。

（十五）『呉中人物志』七。佟培基『全唐詩重出誤収考』による。

（十六）松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店　一九九九年）。

（十七）唐の開元中、ある冬の夜、王昌齢・高適・王之渙の三人が料亭で飲んでいると、たまたま梨園の伶官（宮中の楽師）の一団が来あわせて宴を張り、そこに名妓四人が招かれてきて、当時有名な詩を唱った。王昌齢は「今日われわれの詩のうちでどれが彼女たちに唱われるかによって詩の優劣を定めよう」といった。最初の妓は、王昌齢の絶句「芙蓉楼にて辛漸を送る」の詩を唱い、次に高適の古詩「単父梁九を哭す」の一部「篋を開けば涙臆を沾し、君が前日の書を見る。夜台空しく寂寞、猶お是れ子雲の居の如し」を唱った。つぎに、王昌齢の「長信秋詞」「帚を奉じて平明に金殿開く、且く団扇を将て共に徘徊す。玉顔及ばず寒鴉の色、猶お昭陽の日影を帯びて来る。」を唱った。王之渙はそこで「これら三人の妓は皆俗物だから下らない詩を唱うのだ。もしこの中で一番美しい妓が私の詩を唱ったら、諸君は私を師とすべきだ、もし唱わなかったら私は諸君とはもう争わない」と言った。はたしてその美妓は王之渙の「涼州詞」を唱い、彼は大いに喜んだ。（前野直彬編『唐詩鑑賞辞典』東京堂書店）。